

年前、人類が登場するより遙か前に絶滅したはずの恐竜をほうふつさせる特徴を備えていることが謎になっています。恐竜の岩絵などもメキシコとアリゾナ州の国境の山脈から見つかっており、人間と恐竜が同時代に棲息した可能性を指し示しているのです。しかしこれも、詳しくは別の折に触れたいと思いますが、聖書の中に解明の鍵を得ることができるのです。

神は洪水後、「**地の続くかぎり、種蒔きと刈り入れ、寒さと暑さ、夏と冬、昼と夜とは、やむことがない**」と、明確な季節の訪れを約束されましたが、地軸が傾いた状態で地球が太陽の周りを公転することは、地球上の異なった緯度の地域に以前より広範囲に夏をもたらすことを可能ならしめたのです。北半球では、北回帰線（北緯 23 度 27 分の夏至線）上の地域にまで、太陽が直接真上に来、真夏の炎暑をもたらし、同様に南半球では、太陽が最南に達する南回帰線上に真夏がもたらされることになったのです。言い換えれば、夏と冬の明確な違いは、洪水後の気候の特徴で、洪水前は、地上の様々な地域が、常夏か、あるいは、常冬かの一定の気候に支配されていたのです。アダムから七代目のエノクの時代には、一年が 365 日であったのが、地軸の変化で、公転速度（軌道速度）が遅くなり、したがって、公転にかかる日数が減り、一年 360 日になりました。洪水後ノアの子孫がメソポタミアから東西南北方面に移住したことによりこの洪水直後のデータが世界中の曆に反映されることになり、中東に住んで数学に長けたシュメール人の影響で、円は 360 度、一時間は 60 分、一分は 60 秒という具合に、測量や時間の単位として「六十進法」が広く導入されることになったのです。しかし、八世紀 BCE 以降、一年は再び 365 日となり、今日に至っています。また、聖書では、ライオンがパレスチナ一帯に生息していたことを示唆していますが、ライオンの化石は未だその一帯では発見されておらず、このことは、進化論者や、地球上の人類の歴史を何百万年と推定し、地層、化石、石油、石炭などがどれも非常に長い年代を経て形成されたものであると考える者一説を信奉する者たちが期待するようには、地層に化石が残ることはほとんどないことを示唆しているようです。実際には、動物の死骸は、はげたかなどによってすぐ跡形もなく食い尽くされてしまうのがほとんどで、魚の場合も死後、海底に沈んで化石化するということはずがなく、海面に浮いている間に、他の魚、鳥の餌食となり、やはり化石として残るのは、非常に難しいということなのです。つまり、化石として原型を留めるのは何か特別な状況下に置かれた場合のみで、今日発見されている多量の動植物の化石、骨などは、神の突然のご介入による「激変説」でしか説明ができないのです。

ヨブ記 39 章では、神がそれぞれの動物に異なった習癖、知恵、力、特徴を与えられたことが、野山羊、野ろば、野牛、ダチョウ、馬の例を挙げて語られています。同様に、鷹に季節が来ると南に渡る習性を与えられたのも神でした。「はげたか」(39:27、邦訳では「わし」)には、巣を高い岩場に作り、そこから鋭い眼力で遠方まで見通し、得物を間違いなく捕える習性が与えられたのですが、イエス・キリストは、このはげたかと同じ習性をご自分の再臨のとき発揮されると語られました。イエスが、弟子たちの『人の子の現われる日、どこで救いと滅びとの選び分けが起こりますか?』という質問に「**死体のある所、そこに、はげたかも集まります**」と答えられたとき、このはげたかの獲物をねらって間違うことなく捕獲する習性と同様に主は、違うことなくご自分に属する者（捕えるべき者）を地上から救い上げられると約束されたのです。はげたかが遠方からまっしぐらに突進してきて、降下したかと思うと得物を一瞬のうちにさらって再び高く舞い上がり視界から消えるように、その日、主ご自身が救い上げるべき者をすべて空中に引き上げて下さるので、私たちの側では何もできない、何もする必要はないということです。その日がいつ来てもよいように、主の御旨を实践する生活を日々していればよいのです。これは先行するくんだり、「**人の子の日に起こることは、ちょうど、ノアの日に起こったことと同様です**」(ルカ 17:26~30)と言われたことを、他の表現で繰返されたもので、私たちが全く通常通りの日常生活をしているとき、主の日は突然来るということを教えられたのです。

ノアの洪水が語っている教訓は、その日、箱舟の戸が神の御手によって閉ざされた時にはもうどんなに命乞いをして遅過ぎたように、私たちにあって、主の再臨の日が来てしまったら、もう遅いということです。その日は、父なる神しかご存知ないので、何不自由な生活をしている今、主を受け入れ、従うことを決断しなければならぬのです。一日、一瞬のうちに全世界が激変してしまったノアの洪水の出来事、ロトがソドムの隣町のツォアルに辿り着くか着かないかの短時間のうちに、ソドム、ゴモラの一帯が住民もろとも完全に消えうせたでき事は両者とも、同じことが、「**人の子の現われる日**」に起こるとい、私たちへの確かな覚え書きなのです。使徒ペテロは、世の終わりに嘲る者どもがやって来て、「**キリストの来臨の約束はどこにあるのか、先祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか**」(第二ペテロ 3:3~4)と、神の言葉を信じている者たちを嘲るようになると預言しましたが、その時、ペテロは次のように神のご計画の確かさを語ったのです。「**こう言い張る彼らは、次のことを見落としています。すなわち、天は古い昔からあり、地は神のことばによって水から出て、水によって成ったのであって、当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びました。しかし、今の天と地は、同じみことばによって、火に焼かれるためにとっておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びの日まで、保たれるのです**」(第二ペテロ 3:5~7、下線付加)。すなわち、ペテロははからずも、洪水の前後で世界が瞬時に一変したことを語り、洪水後に新たにされた今日の天地が、再び火の裁きに会う日が来ることを明確に預言したのです。ここでペテロは、ノアの地球規模の洪水は全地、山々を覆っただけでなく、全地、全文明を破壊、抹消したと、語っているのです。今日、海面下に多くの文明都市の廃墟が眠っていることは周知の通りですが、それらは聖書が明確に証している洪水前の世界のまさに滅びの姿なのです。